

アカハタ文学双書



根拠

西野辰吉著

新日本出版社

根 拠

アカハタ文学双書

1963 年 11 月 1 日 初 版

定価 300 円

著 者 西 野 辰 吉

編 者 日本共産党中央委員会宣伝教育文化部
アカハタ文学双書編集委員会

発 行 者 松 宮 龍 起

東京都千代田区神田錦町1の19

発 行 所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (291) 1489 番
振替番号 東京 13681 番

落丁・乱丁がありましたらお取替えいたします

アカハタ文学双書



根拠

西野辰吉著

目次

序章	5
第一章	10
第二章	36
第三章	66
第四章	88
第五章	113
第六章	134
第七章	160
第八章	186
第九章	217

序 章

「ないろう、ないろう、ないろたんこうせんにのりかえのかたはさんばんほーむでおまちください」

案内放送をやらされるようになって半年あまりになる長沢和子は、その列車が停車すると放送がすっかり板についた、ゆっくりとした調子の声を構内にながした。しかし長沢和子のほんとうの職務は出札だったので、彼女はスピーカーに案内の声をながすと、出札の窓口にもどった。

列車からおりた人間が特別に多いことに気づいたのは、そのかえっていった窓口に待っていた十人ぐらいの客の出札をかたづけしてからで、それはもう列車が出ていくこうとしている間ぎわだった。長沢和子はなにげなく視線をはしませたのだが、ホームにそろいの服装をした一

団の男が行列させられていて、その男たちをかぞえている軍人の姿が見えた。その軍人が憲兵の腕章をつけていることに、和子は注意をひかれた。

△朝鮮人なんだわ……Vと和子は思った。カーキ色のよれよれの服をきた一団は、長い距離をはこばれてきたらしく、ひどく疲れているような感じで、動作がのろのろしていて、ものうげなようすだった。彼らは八十人ぐらいの人数だった。

和子は炭鉱の係員もホームに立っていることに気づいた。改札に立っている篠田静子の父もそのなかにいた。

列車が出ていって、まもなく憲兵に指揮されるこの一団の男たちが、渡線橋の階段をのぼっていき、つきそった炭鉱の係員といっしょに、内路炭鉱行きの汽車が待っているホームへおりて、車両のひとつにおしこまれるようになった。

和子はその男たちの顔が日本人の感じとちがうところから、朝鮮人だと思ったのだが、まもなく静子がいってきて、朝鮮人でないことを知らされた。静子はストーブのそばに立って、父親からききこんだニュースを披露した。

「あれ、支那人なんだったってよ……捕虜なんだったってさ」

一九四四（昭和十九）年十月のある日で、そのとき内路駅のストープにはまだ火がはいってなかった。内路炭鉱行きの汽車が発車するまで、改札に立っていた静子は、まるでその冷たいだるまストープが燃えているかのように、ズボンをはいた足をその前にひらいて立ち、だれにいうともなくそういいだした。

事務室にいわせた駅員は、なんとなくストープのまわりにあつまった。そして、しばらく、新聞に出ている戦局や、労働力の不足している炭鉱の話がはずんだ。

翌日、長沢和子は篠田静子から、静子の父が支那人の収容所の看守に命じられたという話をきかされた。

「遠いのよ、熊の沢にあるの。共栄寮っていうんだって……大東亜共栄圏からとったのね」と静子はいった。静子の父篠田伝造はしかし突然それを命じられたわけではなかった。大陸から輸送されてきた捕虜の一団は、むろん坑内労働に使役するためにおくりこまれたので、会社はいぜんから熊の沢に収容所を建てて受入れ準備をしていた。彼女の父はその準備にあたっていたのだが、防諜上家族にも話してくれなかったのだと、静子はいうの

だった。

静子は捕虜を日本人や朝鮮人と接触させない方針だということや、看守にはとくに老練な労働係がえらばれたのだという意味のことを、無邪気な調子で話した。和子はきのうのろのろとうごいていた、どんなことを考えているののか見当のつかない敵国人の群れが、さして遠くない谷間の奥に住みつくようになったのだと思うと、一種ぶきみなものが感じられるのだが、しかし彼女の捕虜についての考えもそうしたばくぜんとした感じいいようにはすすまなかった。

それから二月ほどたって、内路駅の駅員は、また憲兵に連行された一団の「支那人」が、炭鉱へ輸送されるのを見た。冬で、北海道の中央部の内路には雪がつもっており、憲兵は冬外套（がくしゅう）をきこんでいた。しかし連行されてきた「支那人」は、二月前の晩秋の晴れた日に姿をあらわした先着の捕虜とおなじ夏服をきているだけで、外套などはもっていないかった。彼らは寒さにふるえているだけでなく、栄養失調で生気をなくしているようにみえた。

駅のだるまストープにこんどは石炭が燃えていた。和

子は出札口の座ぶとんをつけた椅子にかけて見ていたのだが、こんどは陰惨な感じにこころを打たれて、見てはならぬものを見たような気がした。

翌日、篠田静子の話で、この第二隊の捕虜は百二十数名だということがわかった。

さらに翌年の春、内路炭鉱へ第三隊の「支那人」が輸送されてきた。

当時、平凡な娘だった和子は、異常なものにたいしておどろくことのできない状態で生きていたといつてよかった。異常といえは、和子や静子が国鉄の駅ではたらくようになった事態そのものが異常な状態だったので、戦争がおわってからしばらくつと、どここの駅からも急速に出札や改札や小荷物掛だった女の姿が消えてゆき、女の車掌なども見かけなくなってしまった。内路炭鉱なども戦争の末期は、鉱員の六割が朝鮮人労働者だったのだが、日本の青壮年の男の代わりに強制労働させられていた彼らも、急速に炭鉱から姿を消した。

和子も戦後まもなく臨時雇いを解かれたひとりだったが、炭鉱に連行されてきていた捕虜の送還がおこなわれたときは、まだ内路駅ではたらいっていた。それは最初の

彼らの一団が連行されてきてから、ちょうど一年たった十月のある日で、軍隊にいった男の穴埋めに臨時採用された和子や静子は、その月いっぱい解雇されたのである。

和子の父は線路工手だった。和子はこの父の關係で駅ではたらくことができたのだが、解雇されてから三月ほどあそんで、病院の看護婦見習いになった。そのころから彼女は敗戦前後の異常なふんいきをしらべるような目で見なおしはじめ、生活についての観念を形成するようになったが、しかし駅ではたらいっていた時期に目撃した捕虜のことは、その後十年あまりの歳月がたつて、彼女の夫が捕虜の遺骨送還のための調査をはじめるまで、ほとんど思いだすことがなかった。

和子の夫伊勢崎浩はある日鉱業所へ調べにいったが、内路炭鉱へは二百三十七名の中国人が移入され、そのうち七十二名が死亡していた。

鉱業所ではしかし、この二百三十七名の中国人が捕虜だったということをみとめようとしなかった。

「捕虜……いや、あれは捕虜じゃなかったんじゃない

かな。わたしはたしか労務者だったというふうにきいていましたかね」

伊勢崎浩は総務課へいったが、河野課長の口から最初に出てきたのは、疑いや警戒の調子をふくめた、そういうことばだった。

じつは伊勢崎は総務課へまわる前に労務課へ寄っていたのだが、あるわかい係員が伊勢崎の話をきいて、「ああそうですか、内路で捕虜をつかっていたことがあるんですか」とすなおにおどろくいつぼう、中年の係員の一人がそのわかい係員を非難するように見て、それは総務の所管だと構えたようにいうという、ちぐはぐな応対ぶりにであつていた。

総務課には原という、戦争中から庶務をやっている古い係員がいて、課長に声をかけられた原は、迷惑げな表情をうかべながら、椅子をずらして河野の机のよこへきた。河野は立っていた伊勢崎にも椅子をすすめた。

「遺骨があれば、むろん送還に協力しますよ。しかし遺骨はないんじゃないかね、原さん」

河野はそういった。

「ないですね」と原はふきげんな声でこたえた。

「しかし、だいぶ死んだんじゃないですか」と伊勢崎はきいた。

「帰国させたとき、遺骨はぜんぶもたせてやったんじゃないかね、原さん」と河野はいった。

原は送還事務をやつたのは佐々木で、自分はこの中国人のことはほとんど知らないが、遺骨はぜんぶ携行させたはずだとこたえた。佐々木は当時の渉外係だったが、いまはこの鉱業所にいないのだった。

伊勢崎はいろいろ質問してみたが、この庶務の生き字引だといわれる男の口はかたく、話はあいまいだった。

労務に共通するちぐはぐな応対がこでもくりかえされたわけで、原は課長が伊勢崎に椅子をすすめたりしたことが気にいらないうちにもみえた。伊勢崎にはそれは、ひとつにはレッドパージで追われた自分と会社の関係からきているし、また総務課長と労務の青年が戦後内路へきた人間で、そこに原のような戦前からこの炭鉱で生きてきたものとの微妙なちがひがあるのだというふうに思えた。

原の話は、中国人関係の事務が総務へまわってきたのは戦後で、戦争中のことを知らないのだというところか

ら、すこしもひるがらなかった。しかし受け入れた人数と死亡者の数字だけは、あきらかにした。

伊勢崎は河野に送還関係の書類を見せてもらえないかといってみた。

「あこのころの書類はもうないんじゃないですか。」
原が河野にかわっていった。

「遺骨の問題でしょう。しかし遺骨はないですね。それから捕虜だというのも誤解でね、この中国人労働者の問題は、GHQ時代にすっかり解決されていますよ」と河野はいった。

河野の応対はていちょうだったが、しかしそれは彼なりに確固とした方針につらぬかれているのだということを、そのことはものがたっていた。

第一章

1

その日の夕方、篠田明は市街地をあるいていて、父の同僚だった稲葉貞治に出会った。出会ったのは市街地のはずれにちかい正念寺の前で、篠田明は久米国男といっしょに、寺の横通りにある教員住宅へいこうとしている途中だった。

稲葉はその二人のまがろうとしている横通りから出てきたのだが、営繕のしごとで会社へ出入りしている大工の家へ連絡にきたのだと、篠田たちに話した。

篠田明は稲葉と出会ったとき、日本の炭鉱労働者を西ドイツへ派遣する計画があることを話していたが、不運

だった死んだ父のことを思いださせられた。篠田明の父が死んだのは二年前だったが、退職してから一年あまりにしかならないのに、脳出血であっけなくなっておれてしまったのだった。

退職して日があさかったので葬式には同僚だった労務の係員がたくさん参列してくれただけでなく、鉱業所長の花輪もとどけられた。所長の花輪や、多くのひとが口にした篠田さんは生涯を会社のためにささげたようなものだという意味のことばは、明の母を泣かせた。退職してまもなく死んだため、そんなふうにいわれたのだが、明はしかし、農家の次男から巡査になり、労務係に転身して三十年つとめたが、ついに職員に昇進することができなかった父のことを考えると、その会社にささげたようにみえる生涯を、ひどくばかばかしいものだったのだと思わないわけにはいかなかったのだ。

篠田明と久米国男は稲葉の出てきた横通りへはいった。

「ドイツへいつているあいだ、金のほうはどうなるんだ？」横通りへはいるとき、久米国男は気になるようにふりかえって、稲葉の姿をたしかめながら、稲葉との出

会いで中断された話にかえった。

「どうなるのかな……向こうから仕送りすることになるんじゃないかというんだがね」

明はその西ドイツ派遣の話を、組合の執行委員をやっている義兄の玉井からきいたのだが、玉井も労務の係員に鉱業所へ通達が出ていてということだけを、労働省が技術習得のために派遣するのだということのほか、なにも知っていないのだった。

「向こうから仕送りするって……それじゃ、君、出かせぎとおなじじゃないか」

と久米国男は疑わしそうにいった。

「しかし、向こうは機械化が進んでいるらしいな。カッペ採炭だって、ドイツではじまったんだろう。カッペ採炭は戦争中にはじまったんだというから、その後ずいぶん技術が進んでいるんじゃないか。無人採炭機っていうやつも、だいぶつかわれてるらしいな」

「じゃ、君は応募してみる気か？」

「ちよっと魅力を感じているんだ。しかし、条件しだいだなあ。玉井さんにきいてもらっているんだが、まだ条件がわからないんだよ」

久米国男がそのとき、通りの家の戸口へ出てきた主婦に声をかけて、小野さんの家はどこでしよう、きいた。それは稲葉が連絡にきたと話していた大工の名前だった。

明は久米が稲葉に出会ったのを気にしていることが、わかった。

主婦はその通りにある小野の家を教えた。

「とにかくおれは日本でも、これから急速に機械化されると思うな。人間がモグラみたいにあんな地底へもぐっていつて、はたらかなきゃならんなんてことは、なくしていかなきゃならんよ。人間が石炭を掘っているうちは、しょっちゅう人間が死ななきゃならんのだから……。」明にはしかしそのとき、自分がもし西ドイツにゆくようになると、あの空虚な、ばかばかしい父の生涯を自分もまた生きることになるのではないかという考えが、うかんできていた。

「機械化は進むだろうな。しかし急速にというのはどうかな？ その問題は、いままで石炭資本がどんなやりかたでやってきたかということとの関係でみていかないと、いかんのではないか。人間が石炭を掘っているうち

「そりやそうだけどさ、おれのいいたいのはつまり、人間が地下労働をやらなくちゃならんのはよくないってことでだ、こんな状態は早くなくしたほうがいいということなんだ。君は坑内へはいるの、いやだなと思わなうかね……正直なところさ」

「正直なところか……好きじゃないな。いやだな」

「そうだろう。いやだべさ。坑内ではたらくの好きだなんていう人間はいないと、おれは思うんだ。みんな、いやがっているんだよ。組合の幹部ね、いっぺん執行部へ出ると、なかなか現場へかえりたがらないだろう。ほかの産業を知らないけどさ、炭鉱の組合の場合、とくに現場へかえりたがらないっていう気持ちがつよいんじゃないかな。そこで五万も六万も金をつかって、選挙運動やるっていうことになるんだよ。坑内労働がいやだからなんだ。意識するかしらないかは、べつとしてさ……」

「そうかもしれんな……玉井さんもやはり、五、六

万、運動費つかうのかね」

「みんながみんな、五、六万つかうというわけでもないだらうけどね……しかし、姉さんがこぼしていたよ。運動員にのませなきゃならんらしいんだ。買収っていうのは、わけがちがうんだがね。しかし宣伝しないであれよ。おれがそんなことしゃべったっていうことがわかると、まずいからな」

「わかったよ。しかし、君の話は飛躍しすぎるぞ。なるほど人間のかわりに機械がすべてやってくれるような時代になってくれれば、けっこうだけども。いま問題になっている機械化とか合理化ってのは、そんな夢物語みたいなものじゃないんだぜ」

明も自分の論理に飛躍があることを感じていたので、
にやにや笑いながら黙っていると、久米国男は彼のところ
にある鉱山労働者の国際会議の報告書が、西ドイツの
炭鉱についてもふれているといひだした。

「伊勢崎さんからきているんだがね。読んでみろよ」

二人はそのとき市街地の教員住宅のいっかくへはいつていた。二人は中学の教師をやっている高橋の家で、伊

勢崎浩に会うことになっていた。

「おい、ドイツの話な、伊勢崎さんにはしゃべらんでおいてくれよ」

高橋の家の前で、明はさきに立っている久米国男に、ささやくようにいった。久米はふりかえって、あいまいにうなずき、「こんばんは」といながら、ドアが開けてあって白いレースのカーテンがたれている高橋の玄関へはいっていった。

高橋の家へは伊勢崎がさきにきて待っていた。久米国男は高橋の家へなにかきていたが、明ははじめてだったので、伊勢崎が高橋夫妻に明を紹介した。

明たちは玄関をいったところの、ストーブのある部屋にいちど腰をおろしたが、すぐ奥のたんすや本だなのある部屋のほうへうつった。

「市街までわざわざきてもらって、すまんね」と伊勢崎が笑いながら明に話しかけた。

「いや、ばくこそどうも……社宅じゃどうも目につくもんだから……」

明は弁解するようにいった。明がこの高橋の家で伊勢

崎に会うことになったのは、伊勢崎が久米をつうじて話をききたいといってきたからで、ききたいというのは最近坑内でおこった落盤事故についてだった。明はその落盤事故についてたいして知っているわけがなかった。しかし坑内測量夫の明は、事故のおこる前日、その切羽を見ていた。明は会う気になったが、しかし社宅では人目につくと考えて、市街地で会いたいと希望したのだ。

「坂本君たちは元気でるか」

伊勢崎は解雇されるまえ明の職場である測量調査室にいたので、もとの同僚の消息をきいた。

「ええ、元気です。伊勢崎さんの話が、ときどき出ますよ」

「そうかね、どうせよくない話なんだろうな」

「いや、そうじゃないですよ。みんな、なつかしがっていますよ」

明は仕事のうえで伊勢崎の後輩にあたるわけだったが、しかし、明が採用になったのは伊勢崎の解雇されたあとだったので、二人はいっしょに仕事したことがないだけでなく、話しあったこともなかった。伊勢崎は早くうちとけるために、測量の話をはじめたのだが、そのう

ち明は、どういう目的で落盤事故を調べるのだときいた。

「どういう目的って……」伊勢崎は明の質問の意味をはかりかねたようにいった。「ピラを出すとか、そういうことですか?」

「まあ、そうですね。ぼくは久米にもいっておいたように、こんどの落盤について知りたいして知らないんですよ。それで伊勢崎さんがなんでぼくに会いたいのだか、どうもよくわからないのです」

「そうか、そうだねえ。そういうことをまずはっきりさせておいたほうがいいな」

伊勢崎はものがなしげに笑って、落盤事故というより、内路炭鉱で合理化がどうおこなわれているかということとを調べはじめたので、落盤事故でピラを出したりすることは、いまのところ考えていない、だから目的といえは調査することが目的ということになるのだ、といった。

落盤事故があつた北坑はいちじ採掘を中止していた鉱区だつた。会社はそこへ一月ほど前から、平岸組の入夫をいれて掘進をはじめているのだが、落盤はこの平岸組

の切羽でおこっていた。死者は一人しか出なかったし、落盤はしょっちゅうおこっている災害だったので、新聞にもそれは十行ほどのちいさな記事としてしかあつかわれなかった。伊勢崎もじつは新聞のそのちいさな記事を見て、はじめて落盤があつたのを知つたのだつた。

死んだのは平岸組の組夫で、会社の雇用している労働者でなかつた。会社は堅坑^{たてい}開発をすすめているので、この開発を請負っている川口建設の労働者が坑内にはいつていることは伊勢崎も知っていたのだが、会社の雇用している直轄夫でない労働者が川口建設のほかにもはいつているということを、じつはこの事故があつてはじめて知つたのだ。

この堅坑開発をつうじて、会社は深層の開発計画をたてているわけで、伊勢崎は堅坑が完成すると、あたらしい規模の合理化計画が急速にすすめられるだろうとみていた。その計画はいまのところあきらかにされていないが、しかし、高能率の切羽集約と運搬部門のスピード・アップを中心に、それがすすめられることはだいたい予想できるのだと伊勢崎は話した。

ところで、平岸組のはいつている北坑は、朝鮮戦争後

の恐慌で採算がとれなくなったという理由で、採掘を中止した鉱区なのだ。そこへ下請業者を入れてというのは、新聞がしきりに書きたてている神武景気の石炭業界への影響のあらわれとみることができる。しかし採算がとれないという理由で、採掘が中止されたのだが、じつはこの坑の閉鎖を中心にした企業整備案で、四百名もの人員整理がおこなわれたのだ。そしてじつは石炭資本は好況のとき労働者をやといいいれ、不況になると整理するという合理化方式なるものを、くりかえしてきているのである。

北坑に平岸組を入れているということは、その方式がまたくりかえされることをものがたっている。また、採算がとれぬというのは、人員整理の口実にすぎなかったのだというふうにも考えられる。それからいっぽうですすめられている深層開発計画と、直接雇用でない、低賃金の下請業者の労働者を入れはじめていることの関係をどう考えたらいいかという問題も、出てきている。石炭資本はまた、一部を近代化するだけで、ほかの部分では古い野蛮な手段で酷使するというやりかたもつづけてきているのだ。

伊勢崎は調べてみたが、坑内にはいつている平岸組の組夫は二十数名だった。会社はいつでも自由に彼らをきりすることができるとわけて、あの伝統的な野蛮な合理化方式がくりかえされるにちがいないが、しかし会社がどんな意図で北坑へ平岸組を入れはじめたのかということが、まだつかめないのだ。

伊勢崎はだいたいそんな話をして、自分はどうながく坑内からはなれているので、わからないことが多くなっている、そこで明の見た北坑の状態についてききたいのだといった。

伊勢崎がそんな話をしているあいだに、高橋の妻がお茶を出して、フロへ出かけていった。

明は伊勢崎の話をききながら、自分の父がその北坑の閉鎖で人員整理があったときに、やめたのだということを感じだしていた。

明の家では、当時、父と明と明の姉の千恵子が会社ではたらいっていた。千恵子は病院の看護婦だったのだが、こうして一家で三人も雇用されているというのは、父の伝造がながく労務係に勤めていたという情実によるもの